

「私のスーパーマン」

米沢 綾花
よねざわ あやか

「これからすぐ向かいます。」

電話がなると父は必ずこの言葉を言う。幼い私は、父の電話が大嫌いだ。父の職業は救命救急医。旅行中や当直で一睡もせず疲れて帰ってきた時でも、病院からの呼び出しがくるたびにすぐに病院に駆けつける。

私が記憶の中で覚えているのは三才の大晦日の時、みんな年越しのお買い物で外出中一時間もいないうちに、大嫌いな電話が鳴った。すぐ病院に向かう父に私は、「お買い物もしていないから、まだ帰りたくない。行かないで。」

と告げたが「しょうがない」の一点張りで買い物もせず一緒に帰ることとなった。次の日父から

「病気の患者さんも待っているから、行くことはパパの仕事なんだ。」

と謝られたが、幼かった私は理解できず病院に行った父が許せなかった。

しかし、そんな私が父の仕事に違う思いを抱く出来事があった。それは東日本大震災。埼玉県でも震度五の地震があった。幸いにも家族全員ケガもせず、家の中に損害もなかった。夕方すぎ、母、弟、私の三人で家にいると父が息を切らせ病衣のまま帰ってきた。私たちは父の帰りに驚いた。父は私と弟の体を何度も触りケガがないか確認している姿が、とても面白く、帰ってきてくれて嬉しかった。

私は父に病院に戻らなくていいのか尋ねると、「確認して帰ってきたから大丈夫」と笑顔で言った。でも災害派遣医療チームに所属している父がテレビで震災の状況が映る度に私の嫌いな携帯を何度も確認している事に気づいていた。病院が心配な父を確信し、

「パパを病院に戻してあげる。私にもパパが必要だけど患者さんや病院にはもつとパパが必要でしょ。私がチビパパになる！」と伝えると、父は私を強く抱きしめて、「ありがとう。すぐに戻ってくるからね。」と言い残り病院へ向かった。

時々父の病院へ行った時いつも家では寝てばかりの父とは違い、患者さんと話す父は優しい言葉がけと笑顔の絶えない姿であった。

あの日から父の仕事や医師としての想い、そして父としての使命を理解できる様になり私も医師の夢を抱くようになったことで、大嫌いだっただ電話も嫌いではなくなった。忙しく疲れていてもいつも私たち家族や患者さんのことを一番に考えてくれる父をもつと大好きになった。

いつも明るく前向きで面白い事を言って笑顔にしてくれて「ありがとう。」私に父と同じ医師という夢を持たせてくれて「ありがとう。」私のお父さんでいてくれて「ありがとう。」これからも忙しい毎日だけど、私の目標であるお父さんと一緒に働きたいから、体を壊さずにお仕事がんばってね「私のスーパーマン！」